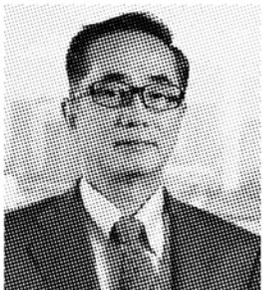


プラネット社長

たまじゅう
玉生 弘昌氏



古文書をつらつら眺めても、その時、判読できるのは半分ぐらい。古文書辞典を繰りながら、一文字、一文字推理し、解読していく。どうしても分からない最後の一字も1、2カ月眺めていると、ある時、フッと解読できたりする。歴史や糸図の謎解きの醍醐味があり、興味は尽きない。

◇ 古文書の類への関心は、子供のころから。オヤジから玉生家の由来や歴史を聞かされて、自然と深まっていた。家には20点余りの古文書、1000点を超える書画が残っている。10月に開かれた栃木県立文書館主催の「戦国史シンポジウム」の関連特別展に、所蔵の「玉入雅楽助宛て古河公方足利高基感状」を初出展した。研究者によると、花押からして足利高基が戦功

古文書眺め、歴史ひもとく

に報いて太刀を授けるという感謝状で、当時の古文書としては学術的に非常に貴重なものがあった。

1500年代の玉生家は、宇都宮氏の重臣で、一時は笠間城の城主を勤め、三万石の禄をいただいていた。それはともかく、宇都宮

そんなこんなで、今

氏の没落後は、帰農し、江戸時代には大庄屋として地方役人のような役割を果たしていたようだ。戦国大名の時代、東国では小田原の北条氏、下野の宇都宮氏、小山氏、那須氏らが割拠し、覇権を競った。戦国時代から織田信長、豊臣秀吉を経て徳川家康の徳川時代と、時代の流れとともに当方も翻弄されていったといっしょう。

でも暇をみては、所蔵の古文書や書画を広げて鑑賞したり、解読したりしている。また関連の展示会などがあれば、足を運ぶようにしている。貴重な古文書は額に入れたり、書画は表具したりして、保存にも注意している。表具をすると、7万円とか10万円とかかかるので、馬鹿にならないが…(苦笑)。

先日、「火天の城」、『利休にたずねよ』などの著作で知られる歴史時代小説家の山本兼一氏と弊社の広報誌の新年号のゲストとして対談した。山本氏の小説は、歴史時代小説とい



世界などを織り込んだ小説が多く、興味深い。対談でも「歴史小説の世界にみる物流戦略」といったテーマで、単に歴史に対する興味だけでなく、弊社の業務領域にも踏み込んでおり、有意義な対談ができた。

▲……………所蔵の古文書に見入る玉生さん

週末は
別人